教員養成課程における図画工作科の「教科観」の認識に重点を置いた授業展開

吹　氣　弘　髙

Teacher Training Program Lesson Development: Recognition of "Subject Perspective" in Arts and Crafts

Hirotaka Fuki

（2021年12月１日受理）

１．はじめに

筆者は，2015年度から中村学園大学の教育学部児童幼児教育学科（以降「本学」と表記）における図画工作科の内容及び指導法等に関する３年生対象の「図画工作科教育法Ⅰ」と４年生対象の「図画工作科教育法Ⅱ」を担当している。毎年,「図画工作科教育法Ⅰ」の第１回目に，受講生自身が小学校で受けた図画工作科の授業に対する印象をアンケート調査している。

2021年度までの７年間，ほぼ受講生の７割が図画工作科は「好きな教科」であると回答しながら，２年後に教員として図画工作科の授業をすることに対する不安をもっており，その理由は，図画工作科の時間に描いた絵や工作の作品等は覚えているが，他教科の時間のように教師による授業場面の記憶がないからである。また，その後の生活場面での「役立ち感」も６割の学生が感じていない。多くの受講生の図画工作科に対する印象は,「絵を描いたり工作したりする教科」であり,「学力をつける教科ではない副教科」というものである。教師の指導に関する印象については前述したように授業場面の記憶ではなく，完成した作品に対する教師の評価や相互鑑賞の記憶である。他教科等と比べ，教師の全体指導の時間が短いため，授業中の教師がどのような指導をしてくれたのかの記憶が希薄なようで，印象に残った教師の姿としては他教科のテストの採点をしていたり，徹底して構図や配色，筆遣い等の描き方を強制されたりというものである。図画工作科の授業の見習うべき教師の姿をイメージできないので，２年後に教育現場でどのように自分が図画工作科の授業をするのか，どのように評価すればよいのか分からないことへの不安がある。７年間の学生へのアンケート調査だけを見れば,今も教育現場では,指導要領の目標を踏まえた図画工作科の授業改善が図られていない実態が観える。また，本学で２度担当した教員免許状更新講習において受講した現場経験10年・20年等の現職教員も指導要領の目標に込められた教科観の解説をすると,「理解していませんでした。」という感想を聞く。図画工作科の教科観を認識していない教員の指導を受けた学生が教員となり，現場で自分が受けた図画工作の授業のイメージのまま目の前の児童に同じような指導と評価を繰り返しているのだろう。

1968年（昭和43年）版の指導要領から現行指導要領に至る内容領域の変遷や目標の文言を丁寧に読めば，現行指導要領図画工作科の教科観は,美術教育の内容領域(絵画・彫塑・デザイン・工作・鑑賞）に接続していない。[1]

図画工作科は，幼児・児童期の子どもの造形遊びの中で観られる，子どもが五感を使って活動する造形的な遊びの中で，主体的・能動的な活動の過程で育まれる創造力や協働力を大切にする教科観であることを認識しなければならない。人間教育のための図画工作科であるという明確な教科観を認識した教員として授業を実現させるためには，筆者が担当する教員養成課程の３年生を対象にした「図画工作科教育法Ⅰ」において，教科観の認識を図ることが肝要である。そうすることで,４年生の「図画工作科教育法Ⅱ」が，子どもの表現の発達段階と，指導要領図画工作科の目標・内容を理解し，確かな教科観に裏打ちされた図画工作科の指導力になると考える。

このような目的から,今年度の「図画工作科教育法Ⅰ」において，受講生が図画工作科の教科観を認識することに重点を置いた授業内容と，受講後の学生の図画工作科に対する印象の変化，教科観の認識の状況を本稿にまとめている。第１回目のアンケート調査と，それぞれの課題に対する学生の反応と理解度，最終回の課題「授業前と授業後の図画工作科に対する印象の変化･考えたこと，感じたこと等」のレポート（800字）から，図画工作科

執筆者紹介：中村学園大学教育学部児童幼児教育学科
別刷請求先：〒814-0198 福岡市城南区別府5-7-1　E-mail:fuki@nakamura-u.ac.jp

に対する“副教科”という認識が，子どもの成長に必要不可欠な教科であるという教科観の転換につながったのかを考察する。

２．図画工作科に対する印象の問題

①　大学３年生の図画工作科に対する印象

毎年，「図画工作科教育法Ⅰ」の第１回目に，「図画工作科に対するアンケート」という学生自身が受けた小学校図画工作科の授業に対する意識調査を実施しており，その結果が７年間ほぼ同様の結果・教育現場の実態を示している。

問１の，「図画工作科は好きですか」に対しては，「好き」と答えた学生が今年度は113/177名（64％），昨年度は70％で，例年60～70％を推移している。

表１．図画工作科に対する意識調査（令和３年４月）

問１ 図画工作は好きですか。	とても	37人	21％	113人 （64％）
	好き	76人	43％	
	どちらともいえない	34人	19％	34人
	嫌い	23人	13％	28人 （16％）
	とても嫌い	５人	３％	
問４ 図画工作の時間に学んだことが、その後何かに役立ちましたか。	役立った	14人	８％	62人 （35％）
	少しは役立った	48人	27％	
	どちらでもない	55人	31％	55人
	あまり役立たなかった	49人	28％	60人 （34％）
	役立たなかった	11人	６％	
問７ 先生として図画工作を教える自信はありますか。	自信はある	４人	２％	20人 （11％）
	少し自信ある	16人	９％	
	どちらともいえない	44人	25％	44人
	あまり自信ない	81人	46％	113人 （64％）
	自信はない	32人	18％	
問８ これからも、小学校で図画工作は必要な教科だと思いますか。	とても必要だと思う	97人	55％	170人 （96％）
	必要だと思う	73人	41％	
	どちらともいえない	７人	４％	７人
	あまり必要だと思わない	０人	０％	０人 （０％）
	必要だと思わない	０人	０％	

これに対し，問４の「図画工作の時間に学んだことが，その後に役立ちましたか」に対しては，「少しは」を含め「役立った」が今回は62/177名（35％）で，過去７年間，平均40％前後で，「あまり」を含めた「役立たなかった」が今回は34％，７年間も30％前後という結果である。

理由としては，「図工の力を発揮する場がない」「テストもないし，生活場面で生かす場があまりない」などとある。何度も言うが，２年後に小学校教員として子どもの前に立ち，図画工作科の授業をする学生であれば，自らの生活環境の中の形や色に関心をもち，できれば日々の生活に取り入れる感性をもってほしい。また，問８の「先生として図画工作を教える自信はありますか。」に対して，毎年60～65％が「自信がない」と答えながら，問９の「これからも小学校で図画工作は必要な教科だと思いますか。」に，毎回90～95％が「必要」と答えるのは，初等教育においては知性と共に感性の育成が必要であろうという感覚的な捉えであると言える。

今回調査の自由記述にも「図工の授業のときの先生の指導の様子が思い出せない。」「図工の時間に何かを教えてもらった記憶がない。」とあった。学生の多くが図画工作科の教科としての価値や具体的な指導に関する知識・技能もほとんどないと言える実態が観える。[2]

②　小学生の図画工作に対する印象

受講生がもっている図画工作科に対する印象に対して，今，小学生として図画工作科を受けている児童の図画工作科に対する印象はどうなのかについて知る手掛かりとして貴重な調査結果がある。人口約52万人の宇都宮市が2006年から市内の市立小学校に在籍する全児童を対象にした「学習と生活についてのアンケート」[3]である。最も新しい調査結果としては2016年に実施された29,104名の子どもへの調査結果のデータがある。

宇都宮市の公立小学校に在籍する全児童を対象にした「学習生活についてのアンケート」の大設問．学習についての①教科の好き嫌い，将来への役立ち感の中の「次の教科などの学習は，好きですか。」と，３～６年生への「次の教科などの学習は，将来のために大切だと思いますか。」という問いに対する回答である。（表２）

ここで着目するのは，小学校１・２年の生活科以外の教科等の中で好きな教科等の１位は体育の90.4％で，図画工作は90.0％と僅差で２位である。これに対して，３～６年生対象の「将来のために大切だと思いますか」では下から２番目という正反対の結果が示されている。

図画工作の数値だけを見れば，74.8％と支持的な評価を得ているようだが，１位の算数は98.1％，２位の国語が97.8％という数値である。下位の３教科を見ると，下から３番目の理科の85.0％に対して下から２番目の図画工作科と最下位の音楽の72.8％だけが70％台で，しかも理科との差が10％以上ある。他の民間の教育研究所等の全国調査の結果とも近似していることから，概ね，全国の小学生児童の図画工作という教科に対する印象と言える。この現状は筆者が実施している大学３年生のアンケート調査の結果につながっている。

③　現職教員の図画工作科に対する意識

このような小学生・大学生の実態と，現場経験10年・20年の現職教員が意識的にさほど変わらないのではないかという疑念を抱いたのが，平成30年と令和２年の２度，担当した教員免許状更新講習の「図画工作科の指導と評

表２.「教科などの学習は好きか、その教科などの学習は将来のために大切か」アンケート結果

学年 / 教科等	小１	小２	小３		小４		小５		小６		全　体	
	好き	好き	好き	大切	好き	大切	好き	大切	好き	大切	好き	大切
国　　語	78.4	74.4	78.7	96.5	75.9	97.6	74.8	98.3	73.8	98.9	76.0	97.8②
社　　会			74.6	95.7	76.4	96.6	69.3	95.7	75.5	92.4	73.9	95.1
算　　数	77.9	76.6	83.6	97.6	80.3	98.4	72.7	98.2	75.7	98.4	77.8	98.1①
理　　科			89.6	87.5	91.6	88.4	85.6	82.3	76.5	81.7	85.8	85.0
音　　楽	88.7	85.4	83.6	78.6	85.1	76.9	82.5	67.2	80.2	68.4	84.2	72.8
図画工作	92.3	89.6	90.6	78.2	92.6	77.6	88.9	71.2	85.7	72.2	90.0②	74.8
体　　育	92.1	91.7	91.7	91.1	90.8	90.6	89.9	89.3	86.5	90.3	90.4①	90.3
家　　庭							91.2	96.5	86.3	97.3	88.7③	96.9③
生　　活	90.3	96.0									93.2	
道　　徳	75.5	75.6	79.2	90.3	82.1	91.4	79.9	88.7	79.0	90.2	78.6	90.1
学級活動	75.5	89.6	88.7	85.0	91.1	87.5	89.5	84.1	89.8	85.2	89.4	85.9
総合的な学習			84.3	86.7	87.6	90.4	85.5	86.9	88.8	88.8	86.6	88.2
ことばの時間活動	85.9	83.2	85.8	92.1	87.6	93.7	85.0	92.6	85.1	92.9	85.4	92.8
英会話の時間	89.4	88.8	90.1	96.1	89.4	96.2	86.2	95.5	84.0	95.8	88.0	95.9

出所）宇都宮市教育委員会：学習内容定着度調査 学習と生活についてのアンケート実施結果報告書.2017.3.p40

価の在り方」の受講者の講座を希望した理由である。どちらの回でも「図工・美術は個人としては好きだが，どのような指導がよくて，どのような評価をしなければならないのかが未だに分からない。他の先生方の指導を見ても，はたしてそれが教育的な指導なのか疑問に思うことが多い」と同等の理由が３割あった。講座を受講した教員に共通するのは，自らの指導と評価に「これでよいのか」という疑問を持ちながらも，納得できる指導・評価等に関する研修に恵まれず，それでもどうにか「図画工作科の授業を変えたい，指導と評価について学びたい」という意識である。学級児童の絵を上手・下手で比べたくない，造形活動は得意な人を育てる教科ではないと理解はしながら，上手に描かせる技能等の指導と上手・下手で評価している自分の指導と評価に疑問を抱いている。

免許状更新講習という研修制度自体が，「多忙」だからという言い訳で教科等の研修会に参加することも，校内研究等における授業改善にも不熱心な教員が存在していることを証明している。学習指導要領の改訂の趣旨や各教科等の目標・内容についての理解もせず，経験的な図画工作科の授業イメージで授業を進め，結果として目に見える形の制作物を子供たちがつくることで安心している。そのような図画工作科の授業イメージを持った子供が教育学部の学生となり，大学の養成課程においても明確な教科観と指導観を持てぬまま教員免許を取得し教員となる。そして，出会う子供たちに経験的な知識と模倣的な指導で作品をつくらせ授業を行う。関心は，他の教科や新た教育課題への対応に向いてしまう悪循環がある。

昭和22年の小学校学習指導要領（以後「指導要領」と表記）から８回の改訂を経ている平成29年の指導要

領の目標と内容領域を時系列に沿ってみると，明らかに戦後の実用主義的な教科観から，幼児・児童の表現の特性・人間形成の教科としての教科観へと転換が図られている。現行の指導要領は他教科と同様に小項目を加え，主たる狙いを「造形的な創造活動の基礎的な能力」を育むことから「生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力」を育むこととし，「喜び・感覚・感性・情操」という美的情操を培う教科であることと，表現・鑑賞活動を通して「自分」と「他者・異文化」を理解する人権・平和の理念を含む豊かな人間性を育成する教科であることを養成課程の内に正しく理解させることの重要性を感じる。[1]

３．教科観を認識させる授業の実践

受講生が小学生だった10年前の指導要領の図画工作科の内容領域には，「造形遊び」が位置付き，鑑賞活動を表現活動から独立して行うことも認められている。しかし，その実態は，指導されるべき〔共通事項〕で示されている「知識」も，創造的な技能を発揮し協同的な造形活動である「造形遊び」による達成感や満満足感を多くの学生は味わっていない。であるからこそ，本授業における教科観の認識が重要である。

これからの時代を生きる子どもたちにとって図画工作科は「好き」で「将来のために大切」な教科だと感じさせるためには，教員養成課程の学生に指導要領目標の教科観の認識をもって授業をすることで指導と評価の改善

を図らなければならない。そのため，本授業が教授的，学生にとっては受動的な授業にならぬよう，学生の実感，共感を伴う学修となることを期待して次のように構想した。

- 第１回目に，「図画工作科に対するアンケート」調査をし，第２回で現受講生を含む，過去７年間のアンケート調査結果から教育現場の図画工作科の授業の実態を本授業の課題として共有する。
- 教育現場の図画工作科の授業の実態に対して，指導要領図画工作科の「目標」はどのような授業，どのような資質・能力を期待しているのかを，より平易な言葉に置き換えて解釈する。
- 教師の指導の強さが分かる年齢不相応の子どもの絵と，教育的な指導によって描かれた子どもの絵をコンクールの審査員の視点から審査し，優秀と選んだ作品に対して自分が「上手・下手」で審査していることに気付く。
- 名画と言われる作品をゲーム的に見る鑑賞活動を通して，多様な鑑賞活動があることと，表現活動だけが楽しい図画工作科ではないことに気付く。
- 指導要領の目標を受けた内容（A 表現と B 鑑賞）は，美術の領域ではなく，子どもの表現の発達段階，造形活動に対応していることを理解する。
- 幼児・児童期の表現には独特の表現方法があることを理解するとともに，子どもの絵の見方で見た絵の「教育的な指導」について理解する。
- 先に観点を伝え，５年生工作「わたしのいす」（DVD：16分）[4]を視聴し，他教科とは異なる図画工作科の授業における教師の指導の在り方を理解する。
- 後学期の教育実習を前に，実習校地域環境を図画工作科の題材に取り入れるという視点で地域環境を見直し指導案に書くためのプレゼンテーション資料を作成する。
- プレゼンテーション資料で取り上げた地域環境と，と子どもたちをつなぐ題材指導案を作成する。
- 図画工作科が教科として位置付いている意味について，経済学・心理学の視点から考察する。

授業形態は，今年度も昨年度と同様にコロナ禍での授業となり，昨年度作成した WEB 課題などの内容，学生の課題に対する反応，課題への興味関心等を基に，オンデマンドによる WEB 課題で取り組む内容と，対面授業（A・B グループの２分割）で実施する内容を分けた。

以下，授業内容・手順などを詳述する。今年度の受講生〔３限88名，４限89名の計177名〕を，４グループに分け，３限 A・B，４限 A・B の４分割による対面授業と WEB 課題を各週で実施した。

① 図工の授業に対するアンケート回答

［授業形態］ 対面授業（45分）と WEB 課題学習（45分）

［内　　容］ シラバスを配付し，本授業の達成目標・概要を説明した後の45分は各自 UNIPA による WEB 課題であるアンケート調査に回答させる。このアンケート調査結果は２回目以降の重要な基礎資料として活用することを伝え，各自，WEB 課題で小学校期の図画工作科に対する記憶・印象等に関するアンケート調査に確実に回答することを重ねて指導する。

質問は，「１．図画工作は好きですか。」「２．図画工作で作品を描いたりつくったりすることは得意ですか。」「３．小学校の図画工作の時間に学んだことが，その後役に立ちましたか。」「４．小学校低学年の頃は，図画工作の授業は楽しかったですか。」「５．小学校高学年の頃は，図画工作の授業は楽しかったですか。」「６．絵を描くことと立体・工作をつくることのどちらか好きですか。」「７．あなたは先生として，図画工作の授業を教える自信はありますか。」「８．これからも図画工作は必要な教科だと思いますか。」の８問で，問い３～８にはその理由記述欄を設けている。（７年間共通）

② アンケート調査結果の分析と考察

［授業形態］ 対面授業（90分）

［内　　容］ 今回（現受講生）のアンケート調査結果が過去６年間の結果とほぼ同じ結果（％）を示していることと，問８の「これからも図工は必要な教科だと思いますか」に対する170名（96％）が「必要」と回答していることと矛盾して芽生えた５つの視点（疑問）を提示する。①.「好き」なのに「得意ではない」はなぜか。②.「絵」より「工作等」が好きなのはなぜか。③．その後に図工の役立ち感がないのはなぜか。④．高学年になるにつれ楽しくなくなるのはなぜか。⑤．図工の指導に自信が持てないのはなぜか。

はじめに，５つの視点に対する分析と考察を２～３名のグループ単位で話合わせ，その結果を全体で意見交換させることで自分だけでなく受講する多くの学生が同様の経験を持ち，同様の不安を抱いていることを共有させることと，本授業を学ぶ意味を理解させることをねらいとしている。特に⑤に対する学生たちの意見「図工に苦手意識があるので教える自信もない」「モデルとなる授業が想像できない」「得意な教科ではないので表現技術の指導に自信がない」など，皆，同じ課題・不安をもっていることを確認させた。

③ 指導要領「目標」の読解

［授業形態］ WEB 課題，レポート提出

［内　　容］ 図画工作という教科に対する理解のなさ，

指導と評価の在り方に関して自信のない現状で，どれほど教科目標が読めるのか，教科観につながる言葉に気付けるのか，言葉を根拠に教科観を述べられるのかを見ることが目的である。この段階は，図画工作科の目標の「自分の」「造形的な見方・考え方」「豊かにかかわる資質・能力」「自分の見方・感じ方」「感性を育み，豊かな情操を培う」等，重要な言葉の意味するところをどこまで理解できるのかの実態把握の狙いをもって一人一人のWEB課題として読解させる。

この課題に対して，23名（13%）の学生は，期待を超えて，一語一語，知り得る造形的な表現を駆使し，指導要領を読み込み，「例えば」など具体例も示して翻訳文を作成したが，108名（61%）の学生は，「自分自身の理解をより確かなものにするため，極力，平易な表現に言い変えてください。」と指示したが，接続的な表現や文末の言い回しを変える程度で，翻訳文にはなっていなかった。教科への関心，必要感の低さがそのまま実態となって表れた。また，単純に文章の読解力，言語表現力や語彙力のなさもあると考えられる。

④　直感的な鑑賞：「仲間分け」と「タイトル付け」

［授業形態］WEB課題，レポート提出

［内　　容］予定では，対面授業で子どもの絵の見方について，受講生同士の交流による共感的な理解を図ろうと考えていたが，2020年２月からのコロナ感染拡大を受け，急遽，WEB課題学修にせざるを得なくなり，内容を入れ替え，ゲーム感覚で直感的に鑑賞する課題に取り組ませた。２つの鑑賞課題は，小学校の鑑賞活動で活用できるように教材化された『アートdeゲーム』（ふじえみつる著.日本文教出版.2017年：世界の名作48点）から４作品を取り上げ，①．４点の仲間分けが何通り考えつくかと，仲間分けの理由・根拠，②．４点から浮かんだタイトルと，その理由・根拠を考えるというものである。[5]

美術作品の複製カードを用いたゲーム形式の活動を通して，子どもたちが自然に作品を観察し，それを自分の言葉で表現する力を身に付けることができるよう考えられたものであり，時間や場所を選ばずに鑑賞の授業ができる。対面授業であれば，この鑑賞活動は，少人数のグループで美術作品の形や色，構図等の造形要素から個性的な見方を知り，作品への多様なアプローチや感じ方の違いに気付き，認め合う関係性を育む鑑賞活動になる。コロナ禍で自由に外出もできない学生にとってタイムリーな課題であったようで，112名（63%）の学生がレポートの感想に「楽しかった」や「初めてで面白かった」と書いた。

また，44名（25%）の学生は，「コロナ禍でなければ対面授業で友人の回答を聞きたかった」，「小学生には予備知識や先入観を持たずに直感的に作品に触れるように見てほしい。きっと大人が驚くような面白い見方・考え方をするだろう。」「鑑賞の授業で児童の想像力を高め，人それぞれに様々な考えを共有し，認め，高めあうことはクラス経営につながると思う。」など学び合う鑑賞題材としての価値に気付いたコメントがあった。

⑤　子どもの絵の見方・評価の在り方（審査員の視点）

［授業形態］パワーポイント資料（音声付き）WEB課題，レポート提出

［内　　容］コロナ禍でなければ，対面授業で実施した内容だが対面授業ができそうにない状況から，今回はWEB課題の内容として実施した。

この内容を対面授業で行うと，「自分が嫌っていた上手・下手で子どもの絵を見比べて評価していた自分に気付いて怖くなった」という気付きのある学修である。

筆者が市の教育センターで小学校教員を対象とした研修講座等のために収集していた，指導者の技術的な指導が強い，５歳児，２年生，５年生，の絵３点と，『子どもの絵の見方』（奥村高明著.東洋館出版社.2010）に掲載されている同年齢の絵，３点の比較である。「年齢ごとに，子どもの絵を審査してください。どちらを金賞にしますか。」と尋ねると，８割以上の学生が，同学年の上手に見える作品に手を挙げる。しかし，必ず「上手くはないが子どもらしい絵の方がいい」という学生もいて，お互いに選んだ理由を言わせる交流によって子供の絵の見方の違いに気付き合う。2021年度は，仕方なく，WEB課題として筆者解説の音声付きのパワーポイント資料を視聴してもらい，子どもの絵の見方，評価の在り方についての学び，気付きをレポートに書かせて提出という形態に変更した。結果，レポート提出率170名（96%）で，内142名（80%）は子どもの絵の見方について，「指導者の指導による上手に見える絵ではなく，子ども自身が創造的な技能を発揮して描いた絵の良さに気付くことができた」というように，教育的な子どもの絵の見方を学ぶ機会となったと書いた学生が42人（24%）いた。

⑥　指導要領（A表現とB鑑賞の内容の変遷）

［授業形態］パワーポイント資料（音声付き）WEB課題，レポート提出

［内　　容］指導要領「目標」の読解，子どもの絵の見方，評価の在り方を踏まえ，教科内容が，昭和43年版の〈絵画・彫塑・デザイン・工作・鑑賞〉の５領域から改訂を経るごとに領域が統合され，現行指導要領の内容「A表現」「B鑑賞」の２領域に至った意味と，その背景にある要因等について解説した。背景にある子どもを取り

巻く造形遊びが可能な安全な自然環境の激減と，昭和期の美術教育への接続をねらった教科観から子どもの表現の発達段階を重視した教科観へ大きな方向転換があったことを理解させることをねらいとしている。現在，使用されている教科書に掲載されている題材，子どもの絵や制作物，活動場面や表情なども示し，子どもの造形活動は，領域などに縛られない発想が活動中に様々に変化していく創造的・発展的な学びであることが実感できるように画像を添付した。

この課題も対面での学生の反応を見ながらの補足説明や，理解を促す子どもの具体的な活動例や発展的な作品例等を見せることができないので共感的な学びにならないのではないかという心配が的中し，レポートには76名（43％）の学生が図画工作科の内容領域の変遷の理由がよくわかったと書いていたが，最終回のレポートにこの内容を取り上げたのは一人だった。音声解説と知識的な内容とによるWEB課題学修は学生にとって面白味のない内容だということで，次年度に向けて改善しなければならないと受け止めた。

⑦　幼児・児童の表現の発達段階

［授業形態］パワーポイント資料（音声無し）WEB課題，レポート提出に変更

［内　　容］これまでのパワーポイント資料にはページごとに筆者の解説を音声で流し，理解を促すようにしていたが，今回は，解説を聞かずに，自らの感性で子どもの絵の表現世界を感じてほしいという思いから本課題の主旨と，美術教育者，ヴィクター・ロ―エンフェルドの「描画表現の発達段階」[6]にだけ音声での解説を付け，他は無音にした。子どもの絵の見方で取り上げた作品と指導要領の目標をつないで，子どもの絵に込められた「自分の」思いや表現の工夫が観える良さや，発達段階においてどの段階にある子どもかもわかり，健全な子どもの絵の良さへの気付きを期待した。

また，子どもの絵の臨床美術としての意味についても取り上げ，幼児・児童期の子どもの表現にはコミュニケーションツールとしての機能・役割があることを伝えた。子どもの絵に技法的な指導をし過ぎることは教育的にも良くないことを理解させることを期待した。解説の音声を付けなかったことの良否は確認しなかったが，レポートには，一枚の絵と子どもが付けたタイトル・コメントを鑑賞し，改めて子どもの表現の良さと価値について132名（75％）が理解を示し，臨床美術の参考作品に深く感動し，もっと臨床美術について研究したいという学生が４名いた。

⑧　図画工作科の授業（DVD16分。５年工作）視聴

［授業形態］対面授業（90分）

［内　　容］本授業のねらいの一つである指導案を作成させる前に，図画工作科の１題材の指導計画や45分間の授業イメージを持たせるために，『トントンギコギコ図工の時間』の授業DVD[4]の５年生工作題材「わたしのいす」（16分）を視聴させた。東京都の公立小学校における図工専科教員による全８時間の授業を16分に編集したものである。毎年，授業の中で視聴させる。豊富な材料と用具，活動環境，導入段階の工夫，子どもに対する適切な安全指導，机間指導時の指導者の立ち位置・役割，達成感を味わわせる鑑賞活動の工夫等々，実践に生かしてほしい指導内容が詰まっている。視聴させる前に視点を示し気付きをメモするよう指示した。視聴後に２～３名でそれぞれの気付きを学び合い，さらにその学びを全体で共有させた。20分で学びをレポートにまとめさせ提出させた。コロナ感染を心配して欠席者が８人いたが，授業を視聴した全員が図画工作科の授業のイメージがつかめたこと，指導者の役割や配慮すべきこと等について理解できたと書いた。

最も，学生が関心を示したのは，材料室の存在である。工作キット等，同じ材料，同じ用具で作成することがほとんどだった学生にとって，指導要領「目標」の「自分の」が，「自分の」材料や用具につながっていることに気付き，感心していた。66人（37％）の学生が指導案作成時の参考になったと書いた。

⑨　教育実習校の地域環境のプレゼン資料作成

［授業形態］パワーポイント資料参照によるWEB課題，地域環境プレゼンテーション（スライド２枚）提出

［内　　容］受講生の教育実習校である小学校地域には図工の題材に活かせる教育環境（地域のひと・もの・こと）と，それらを継承・保存・発展させている地域人材，子どもたちを見守る方々がいることを理解する課題である。初めに，校区の地域環境を生かした指導案を作成するための構想を立てさせる。内容領域，対象学年は自由とする。学校・地域環境の紹介プレゼンテーション（スライド２枚）のテーマは，１枚目を「校区地域と学校の紹介」，２枚目を「子どもたちとつなぐ地域環境と地域題材に選んだ理由等」である。昨年度の３年生５人の地域環境プレゼンテーション（スライド２枚）を参考資料として添付した。

子どもたちが生活する校区，地域すべてが造形的環境であり，図画工作科の題材になる。教師の鋭い感性・企画力と実践力が，子どもたちの感性を育み，自分の住む地域環境の活性化に貢献する地域人材を育成する。学生自身の教科や総合的な学習等の教育活動を通してつな

がった地域環境の記憶や，教育実習校ホームページ，当該市町村の広報情報等も活用するよう指示した。課題提出率100％で，その40％は次年度の受講生に資料として紹介できる内容であった。

⑩　地域題材指導案の作成

［授業形態］パワーポイント資料（音声付き）WEB 課題，地域題材の指導案提出

［内　　容］図画工作科の指導案（題材名・題材設定の理由・題材目標・指導計画・評価計画・本時目標・準備物・学習展開）の書き方の意味等を解説した音声付きのパワーポイント資料を参考に，前課題で作成した地域環境のプレゼンテーション資料を指導案にする課題に取り組ませた。作成に当たっては，子どもたちが題材を通して獲得する造形的な資質・能力を明確に示すこと，題材設定の理由に，企画した題材の良さと子どもたちと地域環境をつなぐ手立て，学校外を表現・鑑賞の学びの場とするための安全指導，安全管理の方法等まで書くよう求めた。指導案を書くことに抵抗感や苦手意識がある学生も多く，教育実習校から，「指導案が書けない学生がいる。大学で指導案の書き方の指導をしてください。」という要望も聞くようになった。まだ子どもたちの姿も観えない学生にとって確かに指導案を書くことは楽しいことでも楽なことではないが，教育実習，教育現場での授業研究等には不可欠である。指導案を作成する過程に教育者としての眼差しが育成される。２週間という提出期限を守って175名（98％）が指導案を提出し，内81名（46％）の指導案は小学校の指導教員に査定授業の指導案として提案できる内容である。

⑪　心理学，経済学と図画工作教育

［授業形態］対面授業（90分）

［内　　容］これまでの図画工作科を分析的・読解的に理解させる内容と違い，客観的・長期的にとらえる内容である。①. 生涯を豊かに生きる力と図画工作，②. 人間の５段階の欲求と図画工作科の２つ内容で構成した。そもそも，指導要領にある「生きる力」とは具体的にはどのような力なのか。人として社会に貢献し，豊かな人生を送るためにはどのような資質・能力が必要なのかを各自で考え，２～３名で出し合い，最終的に全員で50の具体的な力を言葉にさせる。次に，その一つ一つの力を認知能力と非認知能力とに分けさせることでその多くが非認知能力であり，図画工作科で育む資質・能力と重なることに気付かせる。資料として，アメリカの経済学者であるジェームズ・ヘックマンの40年に及ぶ追跡調査の研究を紹介し非認知能力について補説した。[7]

次に，教育心理学等の講義で多くの学生が既習しているアメリカの心理学者アブラハム・マズローの「欲求５段階説」の視点から図画工作科がどの段階の欲求に対応する学びになるのかを考えさせることで，指導要領の「自分の」と表現活動・鑑賞活動とつなぎ，承認欲求・自己実現欲求につながる活動であることを理解させた。また，その基盤となる生理的欲求・安全欲求・社会的欲求は学級経営とつながっていること，図画工作科の指導と学級経営はつながっていることを補説した。[8]

新たな教科，指導法等が次々に教員の指導力として求められる現状と，子どもの生活・学習環境が急ピッチでAI 化，オンライン化する21世紀という時代に，図画工作科が教科として必要なのかという問いに，子どもの成長に欠かせない大切な教科であると言える教員であってほしい。学生の理解度，話題に対する反応を確認するため，後半の20分で気付き・感想等を書かせ提出させた。対面授業では，受講生同士が学び合う交流活動もあり，115名（65％）が「大切な教科だと分かった」，38名（21％）は，「客観的な視点からそれぞれの教科等の意味，価値についての理解が教員には必要である」と書いた。

最終回は，第１回と同様にコロナ対策として45分の対面授業を４回実施した。対面授業では，２～14回の内容をフィードバックし，アンケート調査とその結果に対する分析と考察，指導要領の目標の翻訳から地域題材の指導案の作成，経済学・心理学の研究から観た図画工作科の価値までの一連の学びを全体で振り返った。後半の45分は，各自，授業前の図画工作科に対する印象が本授業での学びの中の，どの内容，どの課題で自分の意識が変わったか，図画工作科の教科観が認識できたかを振り返りレポートにして提出させた。

レポートについては具体的に次の章で述べるが，本学が受講生を対象に実施している「授業アンケート」においても，授業内容に対する評価は良かった。

４．分析と考察

授業を受ける前と授業後の今，図画工作科に対する意識に変化はあったか，あったとすればその内容（複数の内容があればすべて）を自由記述にまとめさせた。学生がどこまで具体的に授業評価・自己評価をするかと心配したが，ほぼ全員が図画工作科という教科の理解につながった内容について一人当たり２～４の内容を取り上げ，自らの意識の変化を振り返っている。

提出されたすべての自由記述を，品詞毎に集計し，頻出順位を付けた。[9] 当然の結果として使用頻度が高い，１位の「図工」（406）と，２位の「授業」（290）を除いた３位の「思う」（254）を１位とした40位「教える」（40）までの品詞を表２に示している。

表３．自由記述における品詞の頻出度（１～40位）

1	思う	254	21	見る	69
2	自分	240	22	子供	66
3	児童	230	23	鑑賞	66
4	作品	184	24	描く	64
5	子ども	179	25	能力	63
6	教科	166	26	楽しい	61
7	教師	166	27	分かる	59
8	表現	157	28	知る	57
9	大切	145	29	自由	53
10	指導	143	30	評価	52
11	受ける	127	31	苦手	51
12	考える	125	32	考え	49
13	変わる	117	33	持つ	49
14	感じる	114	34	好き	43
15	学ぶ	112	35	共感	42
16	評価	111	36	下手	42
17	必要	79	37	自身	40
18	生きる	75	38	方法	40
19	思い	70	39	イメージ	40
20	上手	69	40	教える	40

１位の「思う」から２位の「自分」，３位の「児童」，５位の「子ども」，８位の「表現」，９位の「大切」，10位の「指導」までをつないで見ることで，学生の多くが指導要領の目標にある「自分の」という言葉は，子ども一人ひとりであるということを理解できていることを示している。「自分（子ども）」が「思う」「表現」を「大切」にすることが「教師」の「指導」であるということを理解していると言えるだろう。11位～15位の「受ける」「考える」「変わる」「感じる」「学ぶ」は，課題に向き合う学生の意識が感じられる。

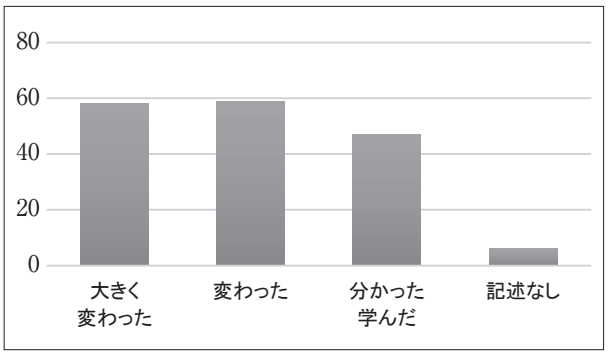

図１．図画工作科に対する意識の変化

図１から分かるように，図画工作科に対する理解が「大きく変わった」学生が60名（34%），「変わった」学生が62名（35%），合計122名（69%）の学生が「教科に対する意識が変わった」と書いている。また，「分かった」「学んだ」や「大切だと感じた」の49名（28%）の肯定的な評価を加えると171名（97%）の学生が教科に対する意識の変化があったと言える。第１回目のアンケート調査の問７，「図工を教える自信はありますか」で，「あまり自信がない」と「自信がない」と回答した113人（64%）の学生にとっての図画工作科に対する「教える自信のなさ」が多少なりとも改善されたと考えて良いだろう。

次に，意識の変化をもたらした具体的な内容について図２に示した。前述したように，学生が２～４つの内容を取り上げたが，その中でも最も多かったのは，心理学，経済学と図画工作教育の価値をつないだ授業の99名（56%）である。「子どもの表現力の育成が将来児童にとって人としてどれほど大切なことなのかを知ることができ，図工科に対する価値観が変わった。」，「図工は生きる力につながる。この教科は，子どもの人生を変えられる教科だと思うほど，図工に対する見方・考え方は変わった。」等という記述があった。

次に多かったのは，子どもの絵の見方・評価の在り方の内容で92名（52%）いた。「自分が全くいい経験をしてこなかったからこそ，教師になった際に上手下手ではなく，自分の思いを大切にする絵の指導・評価を心がけたいと思う。」「子ども主体で，子どもが描きたいものを描きたい方法で描かせ，教師は，なぜそういった表現をしたのか，なぜこの色を使ったのか，子どもの意図を読み取ることで初めて児童にアドバイスできる。見方，感じ方は教師が示すものではない。児童が考え感じたものを表現することが大切だ。」等，自らの経験と重ね，教師となった際の見方，指導・評価について述べている。

３番目に多かったのが，５年生・工作の授業動画を視聴した回の66名（37%）である。「児童に自由に表現させる＝教師の自由時間ではなく，活動の様子を観察して，児童の心情を読み取るなどして，児童にとって良き理解者でありたいと思った。」「図工の授業で教師は，極力，

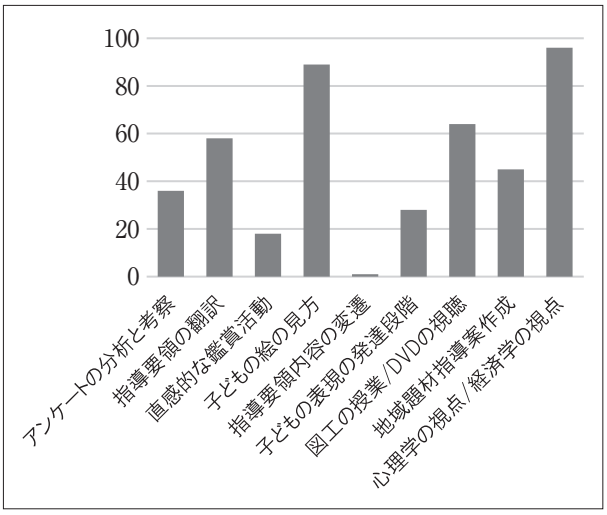

図２．意識の変化を促した内容

口出ししない・手出ししないことが大切で，子ども達が主体的に活動する中で子どもの生きる力が育っていくような授業が図工だと理解できたことが私自身の変容だと思う。」等，教師の声，子どもたちの表現に没頭する姿などが見られる授業の映像力を再認識した。

以下，指導要領「目標」の読解が60名（34％），実習校の地域環境を生かした図画工作科指導案の作成が46名（26％），アンケート調査結果の分析･考察は37名（21％），子どもの表現の発達段階が28名（16％），直感的な鑑賞活動は19名（11％），指導要領（A 表現と B 鑑賞の内容の変遷）は１名という結果である。

本授業の内容に対する学生の評価・感想等から２点，分かったことがある。

１点目は，これまで自分の造形力，感性が否定され，小学・中学・高等学校と抱き続けてきた教科とその指導・評価に対する不満・不信感が，本授業で軽減されたことよる肯定的な「変わった」という意見が多いことである。「大きく変わった」と述べた学生の中には，自分の記憶にあった図画工作の授業と担任教師の評価に対する不信，不満が述べられていた。「小学校から高校までの図工，美術は苦手だった。参考の作品があると，それ以外の考えが思い浮かばなくなったり，自分自身が他人と比べたり，周りの人と比べられたりしてしまう。図工の指導は，初め活動の説明をして，後は先生の自由時間というイメージだった。」「小学生時代の図工は，絵を描いても賞を取れたか，上手・下手で評価されていたように覚えている。人物画を描く時も先生に描き方を指導され，教室に貼られたみんなの絵はどれも同じような作品だった。」「小学生の図工でもっと自分に自信を持てるような声かけを先生にしてもらっていたら，ここまで図工に対して嫌悪感は抱かなかった。」「今考えると，小学生の時に上手な作品だけみんなの前で紹介されたり，廊下の掲示板等に展示されたりしたことにも原因があるのではないかと思う。」「私自身，図工が嫌いで，図工をやる意味というのは表現の技術力を高めるだけのものであると思っていた。自分は能力もなく嫌いだった。そのような授業しか受けてこなかったので自分も同じような授業を考えていた。」などなど，溜まった不満・不信感と納得のいかない指導から意識が解放され，納得のいく内容によって「大きく変わった」になったと学生の記述から読み取れる。

２点目は，対面授業の必要性である。評価の高かった内容は，共通課題に対して個人の気付きを少人数，全体での意見交換を通して，協同的・共感的な学び合いの良さを再認識したことによる評価である。意識が「変わった」には，直接コミュニケーションによる表情や雰囲気，態度などの非言語情報が含まれている。

最も意識の変化に影響したと挙げた，心理学，経済学と図画工作教育の価値をつないだ授業と，図工の５年生・工作の授業動画の視聴は，貴重な対面授業の内容である。コロナ対応でソーシャルディスタンスを保ちながら，協同的な学びの場・時間を設定し，近くの席２～３人で顔を近づけずに互いの考えを交流し，友だちの気付きを共感的に学び合ったことによる大きな意識の変化につながったのだろう。一方，昨年度は対面授業で大いに盛り上がった直感的な鑑賞活動は，WEB 課題の内容として実施したため，予想以上に反応は低かった。多様な鑑賞活動を充実させるためには，友達の多様な見方に気付く交流場面が必要であることが分かった。コロナという厄災によって，当たり前だった対面授業による自分や友だちの考えや気付きを交流し合う直接コミュニケーションによる授業の重要性を再認識する機会となった。

５．終わりに

図画工作科は，一人ひとりの子どもが「自分の」よさや可能性と他者の個性を大切にする教科である。自分で考え，自分で選び，試し，失敗から成功へと向かう活動の過程で，造形的な資質・能力と社会人として必要な資質･能力を獲得していく人間形成に不可欠な教科である。教育現場の教員一人ひとりが，図画工作科の教科観に対する深い認識と，指導の在り方，評価の在り方に対する教育的な理解が必要である。

美術に関する指導技術があることが必ずしも「鬼に金棒」とはならない。「この子どもは美的センスがある」「年齢以上の描写力がある」などと専門家を気取って，間違った指導・評価を子ども・保護者・同僚等に押し付けてしまう危険性がある。

「図画工作科教育法Ⅰ」の授業で，より多くの学生が，図画工作科の教科観について，造形的な表現及び鑑賞の活動を通して，子ども一人一人が「自分の」造形的な見方・考え方を大切にしながら，他者の個性を認め，豊かな感性・情操をはぐくむ教科であることを認識してほしい。多くの学生の意識の中にある“副教科”という印象から，子どもの成長に必要不可欠な教科であると認知させたいという願いがある。

幼児・児童期の子どもの教育に携わる者は，子どもにとっての表現・鑑賞活動の意味を理解して指導にあたらなければならない。専門的な知識・技能以上に，図画工作科の意味を教科外から客観的・長期的に観る教育的な視点も必要である。今後も，教員養成課程における，図画工作科の教科観の認識と教育的な指導・評価の在り方についての授業内容・方法の改善に努め，21世紀に生きる子どもたちのための美術教育の在り方について研究を

継続していく。

1．吹氣弘髙．倉原弘子．新学習指導要領図画工作科における改訂の方向性に関する一考察．中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要第50号．pp197-211．平成30年３月
2．吹氣弘髙．図画工作科の指導のあり方に関する一考察．中村学園大学発達支援センター研究紀要第10号．pp109-115．平成31年３月
3．宇都宮市教育委員会. 学習内容定着度調査 学習と生活についてのアンケート実施結果報告書.p40.2017年３月
4．野中真理子監督編集.『トントンギコギコ図工の時間』紀伊国屋書店
5．吹氣弘髙．図画工作科「Ｂ鑑賞」の指導のあり方に関する一考察．―図画工作科教育法Ｉの授業を通して―．中村学園大学発達支援センター研究紀要第12号．pp67-73．令和３年３月
6．ヴィクター･ローエンフェルド.「美術による人間形成〈直訳:創造的発達と精神的成長〉」竹内清，堀内敏，武井勝雄訳．黎明書房．1963年
7．ジェームズ・Ｊ・ヘックマン. 古草秀子訳.『幼児教育の経済学』東洋経済新報社.pp190-123. 平成27年.
7．大豆生田啓友. 大豆生田千夏.『非認知能力を育てるあそびのレシピ』講談社.pp.9-28. 平成31年
8．中野明.『マズロー心理学入門：人間性心理学の源流を求めて』. アルテ. 平成28年.
9．樋口耕一．KH coder GPL ver.2 頻度表